

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 5月 30日現在

機関番号：41405

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22615049

研究課題名（和文） 明治後期日本における工業的意匠概念と応用美術思想に関するデザイン史的研究

研究課題名（英文） A study on the Japanese industrial design concepts and the idea of applying art to industry in the transition from the Meiji to the Taisho era.

研究代表者

天貝 義教（AMAGAI YOSHINORI）

秋田公立美術工芸短期大学 その他部局等 教授

研究者番号：30279533

研究成果の概要（和文）：明治四十二年意匠法と工業図案教育を中心にして研究した結果、明治後期から大正初期の日本における工業意匠概念が、歴史主義から脱却した新しい形態と装飾を日用の生活用品の用途に適合させることによって、それらの製品の審美性を高めようとした応用美術の思想にもとづきながら、すべての工業製品の美化を目的とする汎美的なインダストリアル・デザインとして意義づけられることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The design concept expressed by the Japanese term ‘Kogyo isho’ in the transition from the Meiji to the Taisho era is defined as industrial design that attempts to beautify all industrial products for daily use. It is based on the idea of applying art to elevate the aesthetic value of industrial products by creating new form and ornamentation, which break free of historicism, suitable for their utility.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2011年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2012年度 | 200,000 | 60,000 | 260,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1700,000 | 510,000 | 2,210,000 |

研究分野：デザイン史・美学・芸術学

科研費の分科・細目：デザイン学

キーワード：デザイン史・応用美術・工業意匠・インダストリアルデザイン・インダストリアルアート・工芸・意匠法

1. 研究開始当初の背景

1) 日本におけるデザイン史の確立

二十一世紀の今日、日本におけるデザインの歴史研究は、デザイン理念の変遷についての研究をふくみながら、1990年前後から刊行された一連の一般的かつ包括的な概説書

（出原栄一著『日本のデザイン運動』1989、阿部公正監修『世界デザイン史』1995、デザイン史フォーラム編『国際デザイン史』2001、竹原あき子／森山明子監修『日本デザイン史』2003 など）に代表されるように、活潑に進められており、日本においてデザイン史

はひとつの学術研究分野として確立したといえる。

従来、こうしたデザイン史では、ニコラウス・ペヴスナーとハーバート・リードらの著作（N.ペヴスナー著『モダン・デザインの展開』1957、H.リード著『インダストリアル・デザイン』1957）などを模範として、産業革命以降の生産技術の工業化と情報の大量伝達技術の発展のもとでのデザインの歴史が、応用美術（applied art）から近代デザイン（modern design）への発展過程として記述されてきた。そこでは、歴史的美術様式に範をとりながら工業製品において実用と美の調和を目指した十九世紀後半の応用美術の思想は克服されるべきものとして取り扱われ、1920年代のバウハウスの活動と理念がひとつの頂点とみなされて、装飾を排除した合理的な形態を機能に従わせるという機能主義的なデザイン理念の形成過程が主として取りあげられている。

しかしながら、今日では、こうした機能主義的理念にもとづくモダニズム・デザインの形式主義的な画一性に対する批判から、とくにチャールズ・ジェンクスによって特徴づけられたポスト・モダニズムの主張（Charles Jencks, “What is Post-Modernism?”, 1986）の1980年代以降の国際的な広がりから、機能主義的・合理主義的理念のみならず表現主義的・非合理主義的傾向をふくむ広範囲なデザインの多様性に注目するデザイン史が求められている。

2) 応用美術思想に注目したデザイン史の研究

以上のような状況を背景にして、本研究では、工業製品の形態ならびに装飾をその用途に適合させようとした十九世紀後半の応用美術の思想を積極的に評価し、この思想が明治初期のウィーン万国博覧会参同のさいにヨーロッパから日本に導入され、この思想にもとづいて日本最初のデザインの法である明治二十一年意匠条例が制定されたことを明らかにした本研究の研究代表者による成果（天貝義教著『応用美術思想導入の歴史：ウィーン博参同より意匠条例制定まで』2010）に立脚して、日本のデザイン史の研究を構想するものである。

3) 明治二十一年の意匠条例制定以降の日本におけるデザイン理念の発展過程の解明

明治二十一年意匠条例は明治三十二年と四十二年に、不平等条約改正と結びついた国際法との関係から工業所有権に関する法律として改正された。こうしたデザインに関する法整備が進む一方で、同じく明治三十年代には工業教員養成所と東京工業学校（後の東京高等工業学校）において工業図案に関する高等教育が進められた。

従来、こうした明治後期の日本におけるデ

ザインに関する法律と高等教育機関の整備に注目して日本のデザイン理念の発展過程を歴史的に解明する研究はほとんどなく、本研究は、応用美術思想との関係を踏まえながら、明治二十一年意匠条例以後の日本のデザイン理念の発展過程を解明するものである。

2. 研究の目的

1) 明治四十二年意匠法にみられる「工業的意匠」という表現の意味の解明

明治四十二年の意匠法では、明治二十一年意匠条例と明治三十二年の意匠法にはみられなかった「工業的意匠」という表現が登場した。従来、こうした表現に代表される明治の工業製品に関する意匠概念については、デザイン史の立場からはほとんど明らかにされていなかった。本研究では、この表現が、明治後期の日本のインダストリアル・デザイン概念を表すものであったことを明らかにする。

2) 明治後半の日本における工業図案教育における「工業図案」という表現の意味の解明

また当時の日本では、工業教員養成所ならびに東京工業学校（後の東京高等工業学校）において工業図案科が設置され、美術工芸とは異なる工業図案の高等教育が進められていた。本研究では、この「工業図案」という表現が、意匠法にみられる「工業的意匠」という表現と同じく、当時のインダストリアル・デザイン概念を表すものであったことを明らかにする。

3) 明治後期日本の工業意匠概念と応用美術思想との関係の解明

明治三十年代から四十年代にかけて特許庁と東京工業学校（後の東京高等工業学校）工業図案科を通じて日本の意匠行政と工業図案教育に携わった中心的な人物として平山英三と松岡寿をとりあげ、二人の工業意匠ならびに工業図案についての主張が、工業製品における実用性と審美性の調和、形態と装飾の用途への適合を主張した応用美術思想にもとづいていたことを明らかにして、工業意匠概念と応用美術思想との関係を解明する。

4) 明治後期の意匠概念と大正期ならびに昭和戦前期の意匠概念との関係の考察

平山英三と松岡寿が奉職した東京高等工業学校の工業図案科は大正三年に廃止されるが、大正十年には、松岡寿と安田禄造を指導者として新たに東京高等工芸学校が設置され、意匠法も改正された。この大正十年意匠法では、著作権法の「美術的考案」と区別するために、意匠が「工業的考案」と規定された。また、昭和初期には、東京高等工芸学校関係者を中心に帝国工芸会が設立されるなどして、産業工芸が振興されるとともに、「工業所有権法規改正ニ関スル会議」では、

「美ノ実用化」が主張された。

以上のような大正期から昭和前期における産業工芸概念ならびに「美ノ実用化」の主張と、インダストリアル・デザインとしての明治後期の工業意匠概念との関係を考察する。

3. 研究の方法

1) 国会図書館所蔵の明治四十二年意匠法に関する帝国議会議事録（第二十五回帝国議会衆議院特許法改正法律案外三件委員会議録など）および外交文書など公文書（万国工業所有権保護同盟条約など）の和文ならび欧文にみられる工業意匠に関する記述の比較検討をおこなうとともに、明治二十一年意匠条例から明治四十二年意匠法までの意匠の意味について、当時の代表的な意匠評論家の塩田真、代表的な法学者の杉本貞治郎と清瀬一郎らによる解説をもとに、当時の意匠概念が主として審美性によって意義づけられていたことを確認した。

2) 工業図案に関する高等教育機関、とくに工業教員養成所ならびに東京工業学校（後の東京高等工業学校）に関する公文書（明治三十年代から大正初期に発行された和文ならびに欧文による学校一覧など）にみられる工業図案科についての各種記述にもとづいて、とくに平山英三による工業図案教育に注目して工業図案概念の考察をおこなった。

3) 明治後期の代表的な工業図案教育家である平山英三の雑誌『図案』、『工業所有権雑誌』などに掲載された意匠図案に関する論説ならびに手記と、雑誌『現代の図案』、『建築工芸叢誌』などに掲載された松岡寿の意匠図案に関する論説の比較検討をおこなった。

また1911年イタリアのトリノで開催された万国博覧会に事務官として派遣された平山英三の残した日記の解読を通じて、当時のヨーロッパにおける各種工芸品の形態と装飾の様式的変化の特徴について考察をおこなった。

4) 昭和初期に発行された雑誌『帝国工芸』の各種記述をもとにして、大正末期から昭和初期の日本における工芸概念について基礎的な考察をおこなった。また昭和三年に設置された「工業所有権法規改正ニ関スル会議」にみられる意匠概念をめぐる議論について基礎的な考察をおこなった。

4. 研究成果

1) 明治四十二年意匠法にみられる「工業的意匠」という表現が、英語の **industrial design** の訳語として用いられたことを具体的な公文書にもとづいて明らかにし、この表現の意味が、工業製品の意識的な美化を目的とするインダストリアル・デザインであったこと解明した。

2) 明治後期の高等教育機関における「工業図案」という表現が、意匠法にみられる「工業的意匠」と同じく、英語の **industrial design** として解釈されていたことを具体的な史料にもとづいて明らかにし、当時の工業図案教育においては、西洋の器物の形態と装飾の模倣や、日本の伝統的・歴史的意匠図案の応用ではなく、日本独自の新しい意匠図案の必要性を求めていたことが明らかになった。

とりわけ平山英三が、その明治三十年代の工業図案教育をつうじて、主として応用美術の考えを基本としながら、Jakob von Falke によるクンストゲヴェルベ (**Kunstgewerbe**) の定義にもとづきつつ、F.G.Jackson の実践的なデザイン理論をとりあげ、歴史的美術様式の応用ではなく、自然の事物に図案の材料を求めることを主張していたことが明らかになった。

3) 代表的な工業図案教育家の平山英三と松岡寿の意匠図案概念の比較検討を通じて、明治四十年代の日本の工業意匠概念が、すべての工業製品の美化を目的とする汎美的なインダストリアル・デザインとして意義づけられることが解明された。

また、こうした工業意匠概念が、松岡寿が初代校長となって大正十年に創立された東京高等工芸学校における工芸概念に発展してゆくことが明らかになった。このことから、明治四十年代が日本のデザインの歴史において画期となる時代のひとつであることが明らかになった。

4) 雑誌『帝国工芸』の記事・論説にみられる工芸概念についての基礎的な研究から、当時、「工芸」という表現が英語では、**industrial design** もしくは **design** ではなく、主として **industrial art** もしくは **applied art** と解釈されていたことが明らかになった。このことから、昭和初期の「工業所有権法規改正ニ関スル会議」における「美即実用」ならびに「美ノ実用化」の主張の意義について研究するさいに、応用美術の思想を積極的に評価する本研究の成果が重要な手がかりとなることが明らかになった。

5) また特筆すべき成果のひとつとして、十九世紀末から二十世紀初頭の日本におけるインダストリアル・デザイン概念の歴史的意義を平山英三ならびに松岡寿の工業意匠図案に関する論説にもとづいて明らかにした研究論文を、2012年ブラジル共和国サンパウロ市サンパウロ大学で開催された第八回国際デザイン史デザイン学会議 (ICDHS2012 8th Conference of the International Committee for Design History and Design Studies) において国外の研究者に対して広く国際的に発表したことがあげられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 天貝義教、明治末期から大正初期の日本における工業意匠概念について-明治四十二年(一九〇二)意匠法を中心に-、美学、査読有、Vol.63、No.1、2012、pp.85-93
- ② 天貝義教、平山英三訳カンニツツ氏紋様論摘訳について、秋田公立美術工芸短期大学紀要、査読無、第16号、2012、61-70
- ③ 天貝義教、近代デザインのモラル、デザイン理論、査読無、第59号、2012、126-127
- ④ 天貝義教、日本近代デザイン思想史の概要-応用美術からデザインへ：意匠条例制定以降の応用美術思想の展開と近代デザイン理念の形成-、秋田公立美術工芸短期大学紀要、査読無、第15号、2011、49-65

[学会発表] (計3件)

- ① YOSHINORI AMAGAI、Japanese design concepts in the transition from the nineteenth to the twentieth century: with special reference to the Japanese industrial design educators Hirayama Eizo (1855-1914) and Matsuoka Hisashi (1862-1944)、ICDH2012、2012年9月4日、ブラジル共和国サンパウロ市サンパウロ大学
- ② 天貝義教、明治大正転換期の日本における工業意匠概念について-明治四十二年(一九〇九)意匠法を中心に-、美学会、2011、10月16日、東北大学
- ③ 天貝義教、近代デザインのモラル、意匠学会、2011年7月16日、国立民族博物館

[図書] (計1件)

- ① YOSHINORI AMAGAI、Design Frontiers: territories, concepts, technologies、Blucher Sao Paulo, 2012、41-44

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天貝 義教 (AMAGAI YOSHINORI)

秋田公立美術工芸短期大学 その他部局
等 教授

研究者番号：30279533